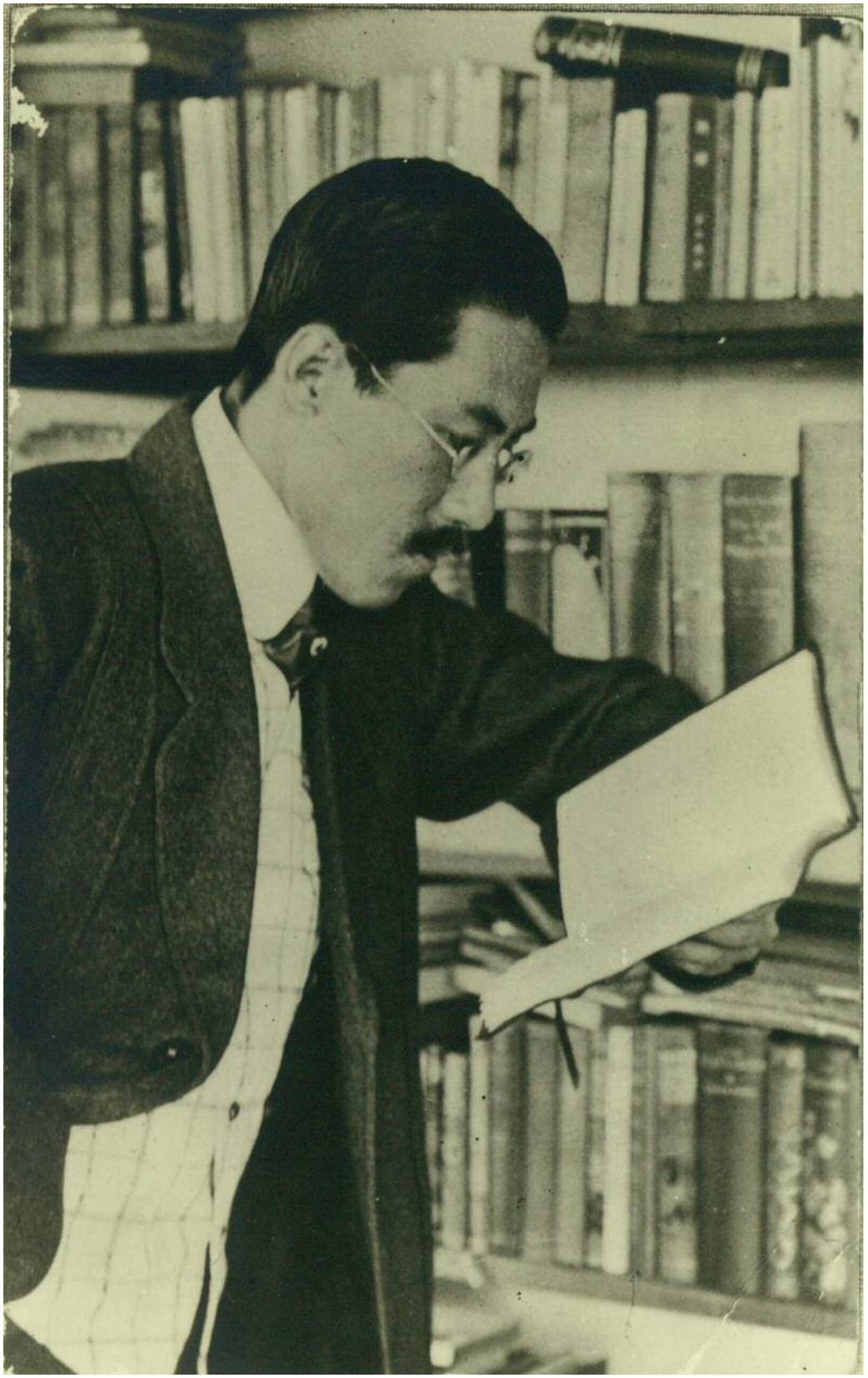


アルプスに挑んだ小田原の登山家

辻村伊助

開催にあたって

『スウィス日記』『ハイランド』の著作で知られる登山家・辻村伊助（つじむらいすけ）は、小田原の素封家として知られていた一丁田（現・国際通り）の辻村本家の次男として、明治19年（1886）に生まれました。早くから登山に親しみ、日本アルプスの山々に登りました。また、大正2年（1913）から翌年にかけて渡欧した伊助は、ヨーロッパ各国をめぐりアルプスやスコットランドの山々を踏破しました。

帰国後は、兄・常助（つねすけ）とともに小田原の辻村農園を経営、高山植物について研究するとともに、町立小田原高等女学校（後の県立小田原城内高等学校）の教壇にも立ちました。しかし大正12年（1923）、関東大地震による山崩れに巻き込まれ、37歳の生涯を閉じました。

海外渡航や登山がまだ珍しかった時代に、実際にヨーロッパに渡り、山に登った体験をもとにした伊助の作品は、登山を志す人々にとって貴重な記録でした。伊助の作品を読むことは、当時の人々がどのように自然に向き合い、また西洋に憧れていたかを知る手がかりになるのではないでしょうか。

没後90年を記念して開催する本展では、登山家・槙有恒（まきゆうこう）が「生涯を温い家庭と友との中に山を思ひ山に登りそしてまた山の美しい植物を友として送られた」と評した伊助の足跡と作品を紹介します。

本展開催が、小田原の文学により一層親しみを深める機会となることを願ってやみません。

平成２５年１０月　主催者

謝辞

本展開催及び本冊子制作にあたり、次の個人・機関の方々より御協力を賜りました。
御芳名を記し、心より御礼申し上げます（敬称略）。

上田 由美
大西 亘
大森 久雄
小川 かい
奥原 穂波
木根 康行
國見 ゆみ子
近藤 信行
坂田 千洋
清水 浩
高野 肇
田村 典子
辻村 百樹
中野 和子
林 静枝
藤木 尚子
三好 まき子
森 正弘
神奈川県立小田原高等学校
株式会社北隆館
県立神奈川近代文学館
公益社団法人日本山岳会
国立国会図書館
静岡市美術館
南砺市立福光美術館
松本市商工観光部山岳観光課
山梨県立文学館
横浜開港資料館

第１章　日本の山に挑む

辻村伊助は明治19年（1886）に小田原で生まれ、東京府開成中学校（現・開成学園）・旧制第一高等学校（現・東京大学教養学部）を経て東京帝国大学農科大学（現・東京大学農学部）を卒業した。伊助は、一高在学中の明治39年（1906）に日本初の登山団体とされる山岳会（現・公益社団法人日本山岳会）に入会し、日本アルプスを中心に数々の山や渓谷を歩いた。

伊助の業績としては、槍ヶ岳（標高3,180m）から烏帽子岳（標高2,628m）への飛騨山脈での初縦走（いくつもの山を尾根伝いに歩くこと）、高瀬川から槍ヶ岳東鎌尾根を越える初登高、積雪期の上高地入りなどが挙げられる。伊助の足跡は、最初に山頂を目指し、次に尾根伝いに幾つもの山を続けて歩き、更に渓谷を踏破するという、探検登山の発展過程と重なっている。

当時、既に陸軍の陸地測量部（現・国土地理院の前身）が、経度や緯度・標高をはかるのに必要な三角点を多くの山頂に設置していた。しかし地図や登山ガイドはなく、日本の中部山岳地帯は未知の領域だった。伊助の活発な登山活動は、日本アルプスにおける探検登山の黄金時代を代表するものである。

伊助は、登山の様子を文章や写真に記録し、山岳会の機関誌『山岳』に発表した。山の特徴や登山に際しての注意点を具体的に記した伊助の作品は、読者にとって良き登山ガイドとなり、写真も好評を博した。

１－１

葉書（松井秀三郎宛）
明治39年（1906）1月16日
個人蔵（小田原市立図書館寄託）

これから葉書の交換をしようと呼びかけている。

背景に写っているのは小田原の海岸。宛先の松井秀三郎は、伊助の同窓生と思われるが、詳しいことはわからない。

１－２

葉書（松井秀三郎宛）
明治40年（1907）9月12日
個人蔵（小田原市立図書館寄託）

家に着いた報告と御馳走になった礼が記されている。

背景は早川海岸を走る熱海鉄道。当時、東海道線は国府津から現在の御殿場線のルートを通っており、小田原周辺の交通は充実していなかった。しかし、明治21年（1888）に国府津～箱根湯本間に馬車鉄道が開通、明治29年（1896）に小田原～熱海間に豆相人車鉄道（後の熱海鉄道）が開通した。

人車鉄道とは、トロッコのような小型の車体をレールの上に載せて数人の人間が押す鉄道。画面右端に車両が写っており、一台につき三人の車夫がついている。

葉書が書かれた明治40年（1907）には、既に軽便鉄道になっていたが、本写真はそれ以前の人車時代のものである点が興味深い。

１－３

葉書（松井秀三郎宛）
明治43年（1910）7月
個人蔵（小田原市立図書館寄託）

旅先から宛てたものと思われる。「百合をうつ　時雨を浴びて只いとし　夢見るごとく　夏山をゆく」と記されている。

伊助は折に触れて歌を詠んだ。

1－4　葉書（松井秀三郎宛）　明治44年（1911）6月27日　個人蔵（小田原市立図書館寄託）

赤城山での様子を報告している。「静かな湖の岸」「毎日の霧雨の中に興深く覚える」といった一節からは、伊助の興味のありかが読み取れる。

イギリスの外交官アーネスト・サトウの子で伊助の友人だった登山家・植物学者の武田久吉（たけだひさよし）は、伊助の好きな山の一つが赤城山で、「山上の伸んびりした景色」や「湖水、森林、牧場」に興味を覚えたと記している。

1－5　葉書（辻村芳子宛）　明治45年（1912）6月4日　個人蔵

伊助の兄・辻村常助の妻・芳子へ宛てて、長男・朔良の誕生を祝っている。また「試験が減って行くのが嬉しくて」「卒論を仕上げた」といった一節からは、伊助の大学生活や勉学の様子が見える。裏面は貴船草のスケッチ。

なお、朔良は昭和12年（1937）に、上海で戦死した。

Column　会員名簿にみる当時の山岳会

創立当初の山岳会の会員名簿には、伊助をはじめ、植物学者・牧野富太郎、民俗学者の柳田國男や作家・島崎春樹（藤村）などの名前がある。

山岳会は当初、動植物に関心を持つ東京府立第一中学校（現・都立日比谷高等学校）の生徒の集まりだった日本博物同志会の支部として、明治38年（1905）に設立された。登山目的の者だけではなく、博物学の研究者や山草や蝶の収集を趣味とする青壮年が所属しており、幅広い層の人々がいたことがわかる。

山岳会には、日本画家・竹内栖鳳の弟子で山岳写真も撮影した画家・石崎光瑶も所属していた。伊助はヨーロッパから石崎にも葉書を送っており、現在南砺市立福光美術館に所蔵されている。

1－6　『山岳』5年1号　明治43年（1910）3月　公益社団法人日本山岳会蔵

伊助初めてとされる山岳紀行文「飛騨山脈の縦走」が掲載されている。上高地から槍ヶ岳などを経て烏帽子岳までの縦走の記録。

一日ごとに、登った場所や泊まった小屋などが順番に記されている。また、山や足元の草花の様子なども書かれている。

「この楽しい旅に日を送れば心配などは薬にしたくも出て来ない、医者には病気と宣告され、家の者にまで持てあまされて出て来た余が、（略）こんな愉快な心持ちになれようとは、自分ながら想像し得なかった。」「山の景色に見惚れながらのそのそと、嘉門治のあとにくっついて行くうちに、総身の垢穴を通じていつのまにか、病が悉く蒸発し去った」という文章からは、伊助が山登りに心を癒され、熱中していく様子が読み取れる。

『山岳』は、明治39年（1906）4月に創刊された山岳会の機関誌。本欄・雑録・雑報・会報などから成り、会員による登山報告の文章や写真・集会の様子・会員の登山記録などが掲載された。

1－7　小島烏水『日本アルプス』第三巻　明治45年（1912）　小田原市立図書館蔵

伊助の友人で登山家・小島烏水（本名・久太）の紀行文集。全四巻。小島自身の登山の記録と、山についての論文の二部から構成されている。伊助をはじめとした登山同好の士が撮影した写真や絵が挿入されている。

『山岳』では、伊助の写真が「これで山が好きにならない人は、そこへ名乗って出なさいと、言ひたくなるほどの出来」と評されており、好評だったことがうかがえる。

1－8 『山岳』7年3号　大正元年（1912）12月　公益社団法人日本山岳会蔵

伊助の「神河内と常念山脈」が掲載されている。上高地を懐かしむ文章から始まり、上高地・常念山脈（飛騨山脈東南部）の登山路や案内人の依頼方法・必要な道具・ルートごとの所要時間などが詳細に書かれている。

伊助は、上高地を「神河内」と呼ぶとともに「神ながら雪置く山」と表現しており、上高地への思い入れがうかがえる。当時の上高地は、旅館ができてようやく開発の手が入り始めた頃だったが、伊助にとっては、それが不快なことに感じられた。「余は主義として、こんな俗了した「上高地」や、そこにある温泉の為めに幾頁を費やしはせぬ、余の筆をとるのは、神河内の昔を憶う人の為めに、或は山登りの途中已むを得ずそこに遊ぶ人々の為めにした」と記している。

私が辻村の負けず嫌いと途方もない強情に接したのは、この旅行中であった。（略）翌朝は払暁に起きて足拵えしたのだが、辻村は下痢をして、ものも喰えずフラフラしている。皆で休養をすすめたのだが、どうしても承知しない。一緒にゆく、と云う。そして途中で随分苦しかったらしいので、何回も、休んで待っていると勧誘しても云うことを聞かない。あえぐようにして、とうとう何里と云う山道、雪渓を登り笠岳山頂を極めたのである。超人的頑固さと云うべきものであった。この頑固さが、後年、スウィスのシュレックホーンで雪崩れによる遭難後、足腰の立たぬ身体で四つ這いになりつつ雪渓を山小屋迄辿りつかせたものであった。彼れの場合、意志の力で生命迄つなぎ留めたのであった。

那須皓「科学者で詩人の山男　辻村伊助の断面」（『日本岳人全集3』日本文芸社、昭和43年）

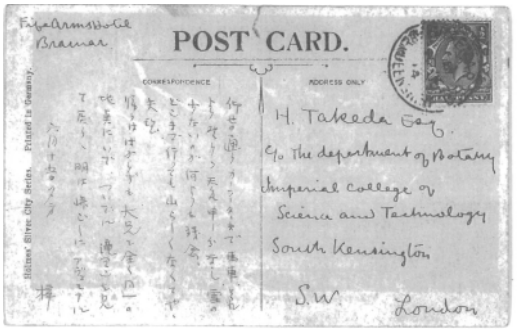
第2章－1　アルプスへの挑戦

大正2年（1913）、辻村伊助はヨーロッパに渡った。

伊助は冬季のメンヒ（標高4,099m）やユングフラウ（標高4,158m）といったアルプスの山々に登り、フランス・オランダなどに滞在した。イギリスの外交官アーネスト・サトウの子で伊助の友人だった登山家・植物学者の武田久吉のすすめにより、スコットランド北部のハイランド地方へも旅行した。この間、各国の山岳会を訪れ、歓迎されたという。大正3年（1914）にはスイスのグロース・シュレックホルン（標高4,078m）に登頂したが、下山中に雪崩に巻き込まれて重傷を負った。療養先の病院で看護師をしていたローザ・カレンと恋仲になり、彼女を伴って帰国した。

伊助は旅先から、友人や家族に宛てて絵葉書を頻繁に送った。また帰国後には、旅の様子を「スウィス日記」「ハイランド」と題して『山岳』に連載した。これらの作品や資料からは、伊助が異国の地で何に遭遇し、何を感じ、また山に対してどのような理想を抱き、山に登る自らの人生をどのように考えていたかがうかがえる。

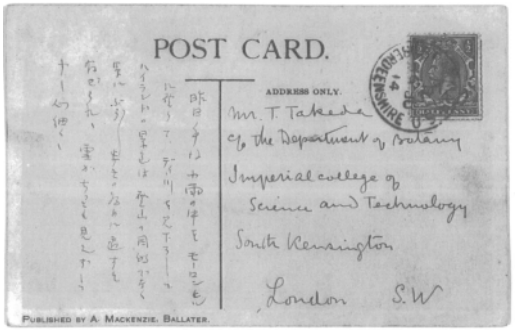
2－1 葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月15日　横浜開港資料館蔵



雪が少ないことを残念がり、周囲が山らしくないことに失望した旨が記されている。『ハイランド』にも、「どこを見まわしても一片の雪もなく、ただ緑の丘と、遠紫に山また山の幾重にも折り重なるのを眺めながら、心には淡い失望を懐かずにはいられなかった」と記述がある。伊助が山登りに強い意欲を抱いていたことがわかる。

文末の「梓」とは伊助を指す。伊助は、上高地を流れる梓川を気に入り、自らのペンネームとしていた。

2－2 葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月15日　横浜開港資料館蔵



登山の報告と、ハイランドの景色について記されている。「登山の目的でなく単にぶらぶら歩きの為めに適す」という一節からは、ハイランドに対して興味を覚え始めた様子がわかる。

なお、『ハイランド』では「この荒れ果てた、樹木のろくに生えていないケールンゴルムの山脈に来て、始めてハイランドの旅の面白さが分った」と記されている。

2－3　葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月18日
横浜開港資料館蔵

アヴィモアでの様子を伝えている。景色を褒める一方、「氷や雪でぎざぎざにつったった山でなくちゃ恐ろし気が無いから物足りないや」と記されており、伊助の山に対する理想像がうかがえる。

『ハイランド』では、アヴィモアの眺望に心から満足して、武田に「以後決してハイランドの悪る口申すまじく」と伝えたと書かれている。ハイランドへの愛着が深まったことが読み取れる。

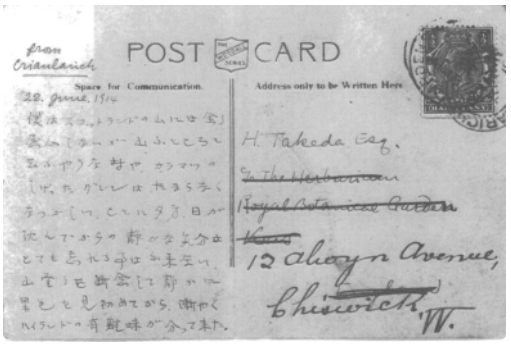
2－4　葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月20日
横浜開港資料館蔵

イギリス最高峰のベン・ネヴィス（1,344m）登山について記されている。

「ハイランドの山は暴風雨に登ると気持ちよく」と記されており、伊助の感想が読み取れる。

一方『ハイランド』では「頂上の小屋に人がいると云ったから行くようなものの、さも無くばすぐに引き返すところだ」と記されており、手紙を記した時と『ハイランド』を執筆した時で感想に変化が見られる。

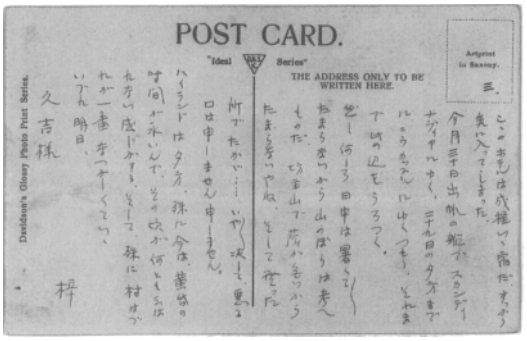
2－5　葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月22日
横浜開港資料館蔵



ハイランドの景色について書かれている。

村や木の様子について「なつかしい」という表現で褒め、ハイランドのありがたみが分かってきたと述べている。伊助が周囲の景色に魅力を感じたことが読み取れる。

2－6　葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）6月25日
横浜開港資料館蔵



滞在先のホテルについて述べるとともに、今後の旅程やハイランドの山についての感想が記されている。暑い上に遮る物がない坊主山なので登山は考えものだと述べるとともに、登っても高さがないと不満を表わしている。しかし一方で、ハイランドの景色は黄昏の時間が良いと書いている。

なお、本資料は二通から成っており、それぞれの冒頭に二・三と数字が振られていることから、三通一組だったと思われる。

2－7　葉書（武田久吉宛）　大正3年（1914）7月29日
横浜開港資料館蔵

伊助とその友人の登山家・近藤茂吉の連名での葉書。これからグロース・シュレックホルンに登る旨が記されている。伊助と近藤は、この山に登頂後、下山中に雪崩に巻き込まれた。

Column　『ハイランド』

雑誌『山岳』に連載したハイランド旅行・日本アルプスでの登山の様子を記した文章・短歌などを集めたもの。伊助の七回忌をきっかけに伊助の友人で山岳会の創立者の一人・小島烏水らの尽力で発行された。

Column　『スウィス日記』とその特徴

伊助の主著で、スイス滞在の様子を中心に記録した作品。『山岳』に連載され、大正11年(1922)に単行本化された(この時の横山書店版のみ、メンヒやユングフラウ登山の部分は収録されていない)。その後も、近年まで復刊や文庫化が繰り返されており、山岳文学の古典とされる。

時系列に沿ってスイスでの行動や周囲の景色や人々の様子、伊助の山への思いが綴られている。登山家の松方三郎は、「辻村さんによって大きい意味でアルプスの何たるかを教えられ、そこにどんな美しい自然があり、美しい人情があるかを知った」と述べており、伊助の作品が与えた影響の一端がうかがえる(本頁での引用は平凡社版に拠る)。

1．情報量の多さ

『スウィス日記』には、登山の記録や周囲の景色だけではなく、山の歴史や地名についての情報や、登山の際に役立つ情報が多く書かれている。

スウィスの地図の中で一番いいのは、測量部出版五万分の一(平地は二万五千分ノ一)地形図、(略)全国で五百九十三枚、各葉一フランずつであるが、折り本にしたのや、布の裏うちしたのもある、殊に此のシートの数葉をつづけて、特種の登山用に便利なのがある(59頁)

ユングフラウは山の姿を表わした名ではなくて、十三世紀の頃に、インテルラーケンの尼達が、あの山の麓に庵をむすんでおった為で、初めて見えたのは、ユンクフラウベルクと云う名であった(88頁)

2．セガンティーニの紹介

『スウィス日記』では、アルプスの画家・セガンティーニが紹介されている。伊助はサンモリッツのセガンティーニ美術館を訪れ、写真も残している。

サン・モリッツでうれしいのは、セガンティニの美術館と、そこを囲む落葉松の密林だけである。(略)私がセガンティニの画を見たのは、あれが最初であって、それまで単に想像にとどまった輪廓に、はじめて生き生きした色彩が点ぜられたのはあの時であった。(220頁)

3．第一次世界大戦の中で

伊助がハイランドにいた大正3年(1914)6月、第一次世界大戦のきっかけとなるサラエボ事件が起きた。伊助は、見聞きした情報や感想を『スウィス日記』に記しており、当時の様子が伝わる。

私達は、大分珍しい話を聞いた、それは墺露の宣戦布告である。墺国皇太子がセルヴィヤで殺されたことは、私がベルリンを出発する前、号外で承知した、そしてそれ等の国交が、危機にせまっていることは、その日の新聞に盛んに書き立ててあったが、いよいよ本式に戦争になるなんてことは、(略)まるで考えもつかなかった。(333頁)

4．伊助にとっての「なつかしさ」

伊助は、ハイランドの景色を「なつかしい」と表現している。また、『スウィス日記』でも「なつかしさ」について説明している。伊助の中で「なつかしい」という表現は、山や自然を見る時の大切な基準になっていたようだ。

オスト・アルペンの長所は、山そのものの美しさや、又は物凄さが、私達に、かえってなつかしい感じを与えるのではなく、自然と人間と、山と里の落ち合った、その深い谷奥の物寥しい有りさまが、人の世を離れ得ない、未練の残る人々に、何とも云えぬなつかしさを与えるものだ。従って、山の頂上ばかり目的にする登山者には、(略)山そのもの快味は、遥かに少ないように思われる。(250～251頁)

5．『スウィス日記』にみる伊助の考え

『スウィス日記』には、強い口調で自分の主張を書いている部分があり、伊助が何を考え、世の中をどのように見えていたかがうかがえる。

自動車に曳かれたり、梯子段から辷(すべ)り落ちる男がある世の中なんだから、危険なのは何も登山に限った訳ではない。死ぬ時さえ来なければ、どんなことをしたって死なないものだ(113頁)

なるべく流暢なるイングリッシュで、ワタクシ、日本人、日本人と答えてやったら変な顔をして、あまり御静かにしていらっしゃるからとぬかしやがった、怪しからん婆だ、英国人でなければ、御静かでは平仄が合わないと思うのがそもそも癪にさわる、第一、面を見れば、忠良なる大日本帝国の臣民とは、すぐ気がつきそうなものだ。(176頁)

全体英国と云う国は、ろくに高い山もないくせに、いやに威張って外国人を科の異なった動物あつかいにするから癪にさわる。日本にも近頃よくある奴だが、わたくしは同国ですとか、あれは他府県の者だとか、やれ県人会だ町人会だと、騒ぎ立てるのが滑稽だ。(178頁)

山を理解してくれる此の人達と物語るのは、(略)非常な幸福と感ぜられた。趣味もなく、理解もない人を、同じ国民と呼び交わすよりも、むしろ国を異にし、語を異にし、又習慣に何等の差あるにしても、今ここにある人々の間におることの、遥かに愉快なのを、私はついに忘れることが出来ない。(397頁)

第２章－２　小田原での足跡

帰国した伊助は、各地で講演するとともに、兄・常助と辻村農園の経営に携わった。また、高山植物について研究し、自宅で栽培もしていた。

また伊助は、大正8年（1919）頃から町立小田原高等女学校（後の県立小田原城内高等学校）で英語や理科を教えた。伊助は自分の登山経験や高山植物のことを授業で話していたようだ。日本人離れした容貌もあって、生徒の憧れの的だったという。

大正9年（1920）にはローザ夫人や子ども達と再びスイスを訪れ、この時の記録は「続スウィス日記」として執筆された。帰国の後、大正10年（1921）には箱根湯本に高山植物園を開いた。結婚後、登山を行った記録はないが、友人への書簡からは、登山への思いがうかがえる。

大正12年（1923）9月1日、関東大地震によって自宅の裏山が山崩れを起こし、ローザ夫人・三人の子どもとともに巻き込まれた伊助は37歳で亡くなった。

２－８　葉書（武田久吉宛）　大正6年（1917）4月26日　横浜開港資料館蔵

武田への礼と、植物の送付依頼が記されている。プリムラはサクラソウ科の園芸植物、セリバワウレンはキンポウゲ科の草。「君に逢ふとロンドンの呑気な生活が思いだされて何よりも愉快だ」という一節や、『ハイランド』での「倫敦の生活は暢気であった。日曜などは武田君と近藤君と三人で（略）まあ暢気に郊外を飛び廻ったものだ」という一節からは、伊助にとって、友人とのロンドンでの時間がいかに充実していたかが読み取れる。

２－９　葉書（武田久吉宛）　大正6年（1917）12月16日　横浜開港資料館蔵

武田の体調を気遣うとともに、高山植物の発芽実験についての報告が記されている。

アーク灯を当てた種子と当てなかった種子で発芽の有無を比較した様子が読み取れる。また、高野鷹蔵（たかぞう）が開く新年会に触れており、「君が出席するのなら僕も行く」という一節からは、伊助と武田の親しさがうかがえる。

２－１０　高山植物種子販売広告　大正8年（1919）4月　公益社団法人日本山岳会蔵

『山岳』13年2号に掲載された、伊助による高山植物種子販売の広告。宣伝文と販売種子の一覧が掲載されている。辻村農園で栽培した高山植物200種類から得たという。宣伝文では、高山植物の栽培が至難の業だったのは前世紀の話で、温暖な平原で培養していい種を選別するとともに、発芽の試験を行えば、他の園芸植物と同様に栽培できると謳われている。

また伊助は、『山岳』13年3号にも同様の広告を掲載している。「瑞西の山岳に登攀の為め」と記されており、伊助は二度目のアルプス登山を予定していたことがわかる。なお、『山岳』によれば、大正8年（1919）10月には、「小田原辻村幹事邸に於て外人会員の為め高山植物展覧会を行ふ」との記録がある。伊助はこの頃、高山植物についての研究成果を積極的に発信していた。

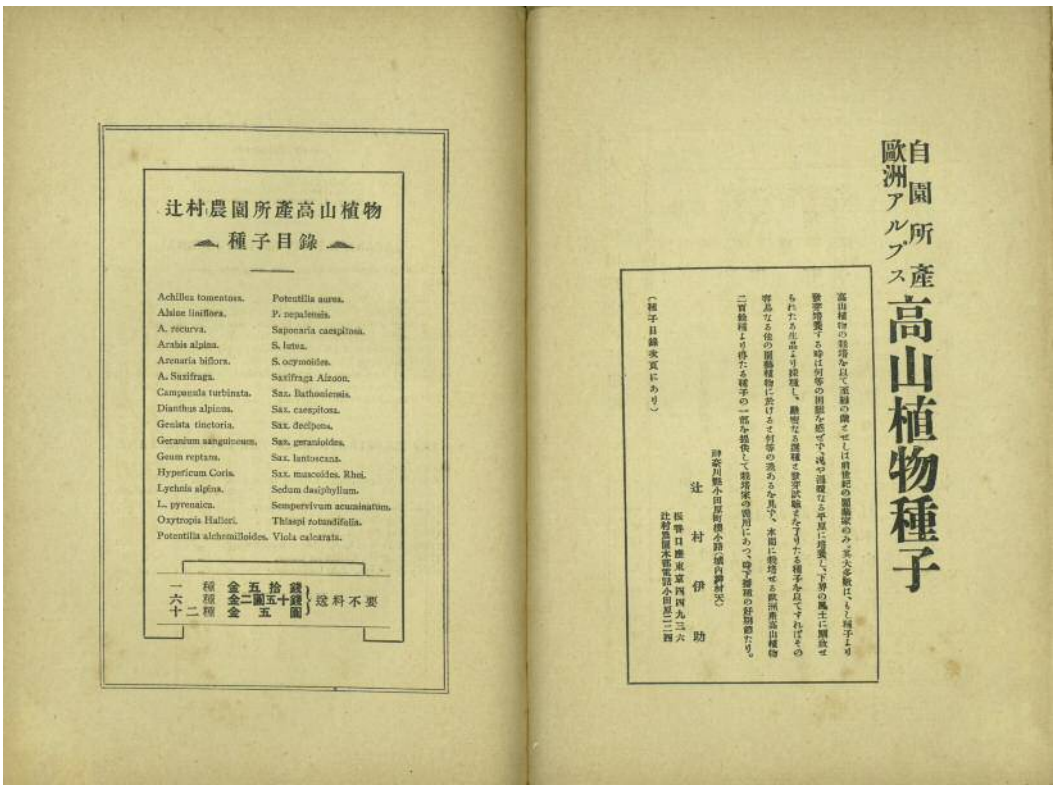
２－１１

書簡（武田久吉宛）
（年不明）12月7日
横浜開港資料館蔵

伊助自身の近況や武田の著書『高山植物』についての疑問が記されている。

家事についての「要するに独り者には説明しても一寸おいそれとは呑み込めない苦労」と表現からは、家庭を持った伊助の気持ちがうかがえる。また、高山植物についてのコメントからは、様々な文献を読んで研究し、自ら実験していた様子が読み取れる。

２－１０


辻村農園所産高山植物
種子目録

Achillea tomentosa.
Alsine liniflora.
A. recurva.
Arabis alpina.
Arenaria biflora.
A. Saxifraga.
Campanula turbinata.
Dianthus alpicus.
Genista tinctoria.
Geranium sanguineum.
Geum reptans.
Hypericum Coris.
Lychnis alpina.
L. pyrenaica.
Oxytropis Halleri.
Potentilla alchemilloides.
Potentilla aurea.
P. nepalensis.
Saponaria caespitosa.
S. lutea.
S. ocymoides.
Saxifraga Aizoon.
Sax. Bathoniensis.
Sax. caespitosa.
Sax. decipens.
Sax. geranioides.
Sax. lantoscana.
Sax. muscoides. Rhei.
Sedum dasiphyllum.
Sempervivum acuminatum.
Thlaspi rotundifolia.
Viola calcarata.

要不科送料
一種　金五拾錢
六種　金二圓五十錢
十二種　金五圓

自園所産
歐洲アルプス
高山植物種子

高山植物の栽培な見て至難の業とせしは前世紀の園藝家のみ。温暖なる平原に培養し、下等の風土に順応せ
敬家培養する時は何等の困難を感ぜず、現や同種なる平原に培養したる種子なる故、下等の風土に順応せ
られたる生品より繁殖し、繁盛なる園種を發芽試驗をなしたる種子なる故、何等の効ある事なり、水面に栽培せる歐洲産高山植物
の寄品なる後の園藝種物に於ける何等の効ある事なり。水面に栽培せる歐洲産高山植物
二百餘種より得たる種子の一部を掲載して栽培法の説明にあつて、時下園藝の好参考たり。

神奈川縣小田原町橋本辻村農園

辻村伊助

振替口座東京四四九三六
辻村農園小田原二三四

（種子目錄裏頁にあり）

２－１２　書簡（武田久吉宛）　大正9年（1920）2月15日　横浜開港資料館蔵

武田の著書『高山植物』の改訂に際して、武田から助言を求められたことへの応答だろう。

伊助は、地味な装丁を希望するとともに、索引を付けることを提案している。また、石灰と植物との相性について考えを述べるとともに、更に同じ花崗岩でも日本と欧米のものを一緒に考えるのは無理があるのではないかと、内容面での疑問も挙げている。

日本の土は酸性が強いため、石灰が多くアルカリ成分が強いヨーロッパの土壌とは環境が違う。伊助も、ヨーロッパの高山植物を日本で栽培するにあたってこの問題に直面したのだろう、内容への関心の高さがわかる。

なお、この書簡の封筒に印刷されている「櫻小路」という地名は小田原には存在しない。伊助の兄・常助が小田原城から辻村農園までの道に桜の苗木を寄付して植えたことから名付けたものだという。

２－13

２－１３　伊助一家　年不明　公益社団法人日本山岳会蔵

伊助一家の写真。伊助がグロース・シュレックホルンで遭難した際、入院した病院で看護師を務めていたのがローザだった。伊助は結婚に際して実家の母親や兄の許しが得られるか悩み、雷の中で湖にボートで漕ぎ出したり、枕の下にカミソリを忍ばせたりしていたという。

最終的に旧制第一高等学校の同窓生で農学者・那須皓の口添えもあって実家の快諾を得ることができ、二人は小田原で結婚生活を始めた。

２－１４　近藤家での集合写真　大正6年（1917）11月25日　小田原市立図書館蔵

伊助の母・歌子（後ろから三列目、左から三人目）の実家・白根（現・伊勢原市）の近藤家で撮影したもの。後ろから二列目、左から三人目が兄・常助、右隣が長男・梓、ローザ夫人、三男・秋葉、一人おいて次男・春名と続く。

２－１５　町立小田原高等女学校での伊助　大正9年（1920）5月21日　神奈川県立小田原高等学校蔵

伊助が勤めた町立小田原高等女学校で。台紙に「辻村氏第2回目渡欧送別記念」と記されている。

伊助は大正8年（1919）頃から同校で英語・理科の教授嘱託を務めた。当時の校長・峯堅雅からの懇請があったとされる。教室ではスコットランドの民謡を歌ったり、登山や高山植物の話をしていたようで、当時の在校生の手記からは伊助の人気ぶりがうかがえる。また、在校生が伊助の家に遊びに行き、「奥様お手製のクッキーに恐縮しながら、名曲レコードを聞いたり、大きな、カッコウの鳴く掛時計におどろいたり、ロックガーデンを見せていただいたり」するなど、生徒達の交流もあった。

なお、大正8年（1919）には、県立小田原中学校（現・県立小田原高等学校）主催で山岳幻燈講演会が開かれ、伊助・近藤茂吉・高野鷹蔵が招かれた。伊助は欧州アルプスについて講演したようだ。

教壇の上の先生は、植物の講義の合間にスコットランドの民謡を聴かせて下さったり、ヨーロッパアルプスの話をして下さったり、高山植物をむやみに採ることは山に対する冒涜である、自分は種子を採って来て発芽させている等の格調の高い話をして下さいました。鳥毛の飾りのついたグリーンのチロルハットを粋に冠り、美髭をたくわえ、鼻眼鏡をかけ、冬は短いコートで、大きなストライドで校庭を闊歩される姿を見ると「グリーン君のお帰りだ」等囁き合ったもので、大正の頃にしては、超ダンディというのか日本人離れしていて、女学生は大騒ぎをしたものです。

河野（吉野）園子「山に生き山に消えた辻村伊助先生」
（『槙の木陰』、昭和58年）

２－15

２－14

２－１６　伊助の息子と常助一家　大正10年（1921）頃　個人蔵

伊助の息子と常助一家。前列左から克良（常助の次男）・梓（伊助の長男）・眞弓（常助の三男）・朔良（常助の長男）・春名（伊助の次男）。後列左から常助・秋葉（伊助の三男）・芳子（常助の妻）。常助の子ども達と伊助の子ども達は良い遊び相手だったという。伊助は、自らの好きな川や山から息子の名前を付けた。長男・梓は上高地を流れる梓川、次男・春名は群馬県の榛名山、三男・秋葉は静岡県の秋葉山にちなんでいる。また、常助は木から息子の名前を取ったという（長男・朔良はサクラ、次男・克良はカツラ、三男・眞弓はマユミ）。

大正時代の我が家に、クリームやバターをふんだんに使ったクッキーや料理が日常化していたのは、叔母のローザの伝授だった。ローザの日本語はあまりうまくなかった。私の母との会話ももどかしいものだったように幼な心の記憶がある。異人さん高いと私の母にこぼしていたことばをなぜか憶えている。外国人と見て掛値をする商人がいて困るという意味である。（略）伊助とは英語で話していた。しかし元来はドイツ語圏の人であったから、子供達にうたってやった子守歌はドイツ語だった。多分ドイツ語で語り合える相手をもっていなかったであろう。／ローザは勿論クリスチャンで、いつも十字架のペンダントをつけていた。じみな裾の長い服と、時には顔に薄いベールをかけた外出姿が印象に残っている。

辻村克良書簡（文藝春秋社 飯沼康司宛）、昭和60年12月23日

２－１７　書簡（高野鷹蔵宛）　大正12年（1923）9月1日　山梨県立文学館提供（原本個人蔵）

山岳会の創立メンバーの一人で伊助の友人・高野からの手紙への返信。体調が思わしくないことや、医者に転地療養を勧められたものの金銭的な余裕がないので難しいこと、高野の気遣いへの感謝が綴られている。伊助は『ハイランド』に、「悲しいことに日本は陽気の悪い国だ、何しろ半年以上じめじめ湿っぽくて気持ちが悪くてたまらない」と記しており、長い間日本の気候に馴染まなかったことがうかがえる。

「どうせ畳の上で死ぬ心掛けはしないから」という一節からは伊助の人生に対する考え方がうかがえる。また、「ふさぎ込んだ訳もあるがこれはむしろ興味中心で聞いて頂くべき」や「辻村は相変わらず仕様がない奴だなんて云ってはいけないよ」という一節からは、伊助の友人への態度や親密さが読み取れる。

本書簡の消印は関東大地震当日である。伊助はこの書簡を投函した後家に戻り、山崩れに巻き込まれたと思われる。

２－１８　「続スウィス日記」手稿　大正11年（1922）頃　公益社団法人日本山岳会蔵

関東大地震の後、三年の間に断続的に遺書・手帖・遺体などが見つかり、この手稿も発見、掘り出された。

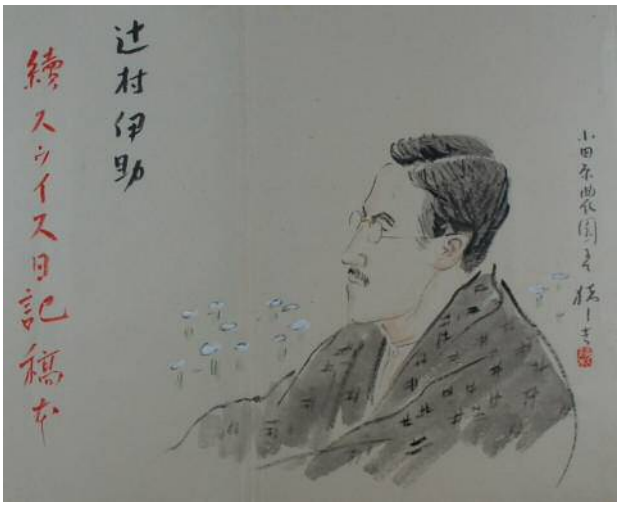
伊助が二度目に渡欧した際の記録である。スイスの風物が記されている点や、「山へ行こう、この高原を越えて雲のように山へ行こう！」という山への強い思いが表れた一節は『スウィス日記』と共通する。一方で、「家族と共に居れば独り離れて山を思い、山に入れば却って麓に残した家族を想うのではあるまいか。私には前の独り旅がたまらなくなつかしい。何の羈絆も拘束もなく、興に乗じては嶺から嶺を渡り歩いて、山で死ぬ日をすら美しく脳裏に画いた若い日は、もう私には再び帰って来ないのか」という一節からは、家族を持ち、山への気持ちが変化した伊助の心境もうかがえる。

本手稿は、兄・常助から高野鷹蔵に贈られた。高野はこの原稿を山岳会の図書室に寄贈することに決め、伊助の友人や家族らとともに装幀した。表紙を描いた中村清太郎（登山家・画家）は、牛のなめし皮に焼印を入れ、中央部に十字架を、周囲には山・高山植物・陽光を配したという。

小島烏水や那須皓、スイスでの登山を共にした近藤茂吉やイギリスで共に遊んだ武田久吉など、伊助と親しかった人々が歌や文章、絵を寄せており、伊助と友人らの交友の深さが伝わる。

世に生死を共にすると云ふ事があるが戦争でもない限り死生を共にした友達はめったにあるものではない　此の稿本を読んでも　上梓されたスウィス日記を読みかへしても　最後に頭に浮ぶものは　あのアバランシュの音　音なんか無かった様だが　雪まびれの身体をやおら起して「辻」を見つけた時の嬉しさ　吾れ未だ死せず友亦生けり　是れ命なりと考へたかどうか

昭和七年八月廿六日　近藤茂吉記



伊助の友人で画家・茨木猪之吉が描いた中表紙。辻村農園での伊助がモデルだという。

私は小田原人として辻村伊助さんのあることを気強く思つてゐた。小田原相談などといふ言葉に侮蔑を感ずる度に、私は自分の郷土への愛着から伊助さん或ひは二見孝平さんなどを思ひ出した。いまの若い小説家の牧野信一君なども純小田原人である。詩人の井上康文君も純小田原人である。

伊助さん（私は私が小さい時分から呼び慣れた名で呼ばして貰ふ）は小田原人としての旧タイプを代表した人ではない。新しい小田原人の代表である。それは五六年前に『伊助さんにでも町長になつて貰つたらどうだ』と若い小田原人の話に出た位である。伊助さんと町長……其話を地下の伊助さんにきかせたら苦笑するであらう。しかし伊助さんは小田原を愛してゐた。だからこそつまらない町立の高等女学校に、懇望されて教師ともなつてゐたのである。

伊助さんは音楽好きな、夫人のローザさんの好みで欧式に住んでゐた程の人であるが、どこかにプリミチイブなところがあつた。そして世界的に其研究を持つてゐるからといふのではないが、実際険しい山のやうな性格があらはれてゐた。

六尺豊の高さで細く高く洋服を着こなしてゐる文明人のかげに原始を慕ふ感情がひらめいてゐた。

八年程前私がまだ山岳研究家としての伊助さんを知らなかつた頃ある私的な音楽会の席上で伊助さんのアルプス登山の話を聞いた。勿論その席で伊助さんとローザさんとのローマンスを聞きはしなかつたが、その時の氏の印象はいかにも山岳を背景として恋のローマンスを編むにふさはしく感ぜられた。雪の崖から千尺をまろび落ち負傷してちりぢりに帰る高峰の夕まぐれ、氷河の裂目におぼろに白衣の女を見た印象の話など、奇蹟とも言ふべき生命びろいをしてその果てに高峰に取りめぐられた病院で親切にみとつてくれた彼女と白い雪の中から紅い花の咲くやうなローマンスを持つことがいかにも美しく思はれた。

夏の夕方など氏が夫人と一緒に可愛い子供さんを連れて歩いてゐるのによく逢つた。

『やあ。』といふ、

『やあ。』と答へて碌にお辞儀もしないで話し合ふ。それから別れる時も『やあ』一つである。それは伊助さんなど（伊助さんは私の長兄次兄等と同年輩であるが）の友達がする流儀で、粗野に見えて最も親しみのある言葉なのである。

二年程前湯本早雲寺のところに居を構へてから、『ここは危険なとこだなあ。』と親友の堀内氏（氏は中村星湖氏の叔父さんにあたる）が言つた時『うん、僕は山が好きだから山で死ぬかも知れない。』と言つたさうである。言をなして九月一日の大震に地下三百尺の早川へ夫妻子供一家五人がそのまゝ埋られてしまつた。さうして掘り出す術もない。見つけられた論文も遺書によつて焼くといふ……しかし氏の山岳研究だけはいつか世に出るであらう。兄さんの常助氏はそこに供養塔を立てる由であるが、山に生きた伊助さんが山に死んだのがせめてもの心やりであらう。

福田正夫「箱根で惨死した辻村伊助さん　亡き山岳研究家を憶ふ」『東京朝日新聞』大正12年12月17日

何のこだわりもなく、変な技巧もなく、すらすら書かれた君の紀行は、単なる旅の記録に止まらないで、多感な君が折にふれて心に思うた感じを、偽りなく巧みに織り込んである。

君の講演が矢張りそうであった。偽りや飾りのない、純真な物語りを、殆どヂェスチュアもなく、大して抑揚もない調子で談されるのに、聴衆はシーンとして耳を傾けるのであった。

座談では折々上品なユーモアと、時には辛辣な皮肉が交ったが、内容の貧弱な、空虚な談話は滅多になかった。よく二人は高山植物の話を始めると、スッカリ夢中になってしまって、他人が同席して居ようが居まいが、外のことには耳を傾けないで、夜遅くまで、十二時一時が過ぎても、まだ語り合ったものである。

武田久吉「追憶」（『スウィス日記』平成10年、平凡社）

気儘の気性から、隔てのない友人に対して、君は思い切った我が儘を云ったものだ。自分に都合のよい勝手な理屈をつけて、気に向いた註文を発することも少なくなかった。それで居て誰でもが、いくら我が儘を云われても、外の人から云われた時の様に、不快な感じも起きずに、寧ろ喜んで君の希望を容れた程、君は友人から愛されて居た。従って、君が真の意味に於ける朋友を信じていたことも中々厚かった。震災後偶然にも最初に発掘された遺言状に、万一の場合は後事を友人に託すと誌されてあったことでもよく知られるのである。

武田久吉「追憶」（『スウィス日記』平成10年、平凡社）

第３章　辻村農園と辻村常助

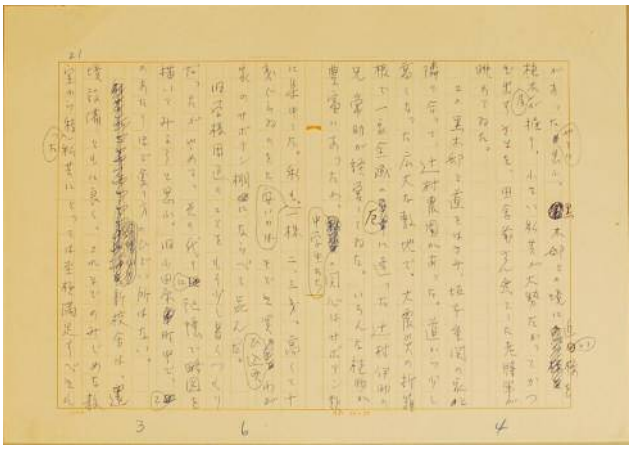
辻村家の出自は吉田島村（現・神奈川県足柄上郡開成町）とされる。江戸期に呉服商などを営み、有力商人となった。後に五代目の甚八（真助）が土地と山林に投資し、小田原・伊豆・山梨などに山林を所有した。

明治34年（1901）頃、六代目当主で辻村伊助の兄・常助が辻村農園を開設した。当初は現在の小田原駅の場所だったが、熱海線（現・JR東海道線）小田原駅建設による土地買収で、大正6年（1917）に現在の辻村植物公園付近へ移転した。

大正時代から昭和初期にかけて、鉄道などの輸送手段が発達したことで東京や横浜など大都市の消費圏と園芸農業の生産地との距離が近づいた。辻村農園では、花卉（観賞用の園芸植物）や蔬菜（野菜）を栽培するとともに東京に販売所を設置し、「辻村農園花倶楽部」と称して、東京市内の顧客を対象に毎月数回花を配達するサービスを行うなど、幅広く事業を手掛けた。

また、辻村農園では苺などの果物も栽培された。それらを加工したシロップやフルーツバター・ジュースなどは「高級」「天然」を宣伝文句に百貨店でも販売され、お中元での贈り物にもなった。

３－１　尾崎一雄「あの日この日」原稿　昭和46年（1971）県立神奈川近代文学館蔵



小田原出身の私小説作家・尾崎一雄の自伝的作品。主に大正12年（1923）から昭和20年（1945）のことが書かれている。単に思い出したことだけではなく、数多くの文献を調べた結果や、友人の証言などが盛り込まれている。

展示部分は、尾崎が神奈川県立小田原中学校（現・県立小田原高等学校）に在学していた時の思い出を記した箇所。尾崎はサボテンを買い込み、家に並べたという。大正初期の辻村農園の様子がわかる。

３－２　辻村常助　昭和7年（1932）頃　個人蔵

明治14年（1881）～昭和34年（1959）。東京府開成中学校（現・開成学園）を経て家業を継いだ。辻村農園を経営するとともに雑誌『家庭之園藝』を創刊して園芸知識の普及に努めた。また自らも植物の栽培や果汁の効能、辻村農園の製品についての記事や談話を発信した。

３－３　辻村農園広告　大正2年（1913）頃『箱根植物』（三省堂書店）所収　小田原市立図書館蔵

辻村農園広告　大正2年（1913）頃
『箱根植物』（三省堂書店）所収
小田原市立図書館蔵

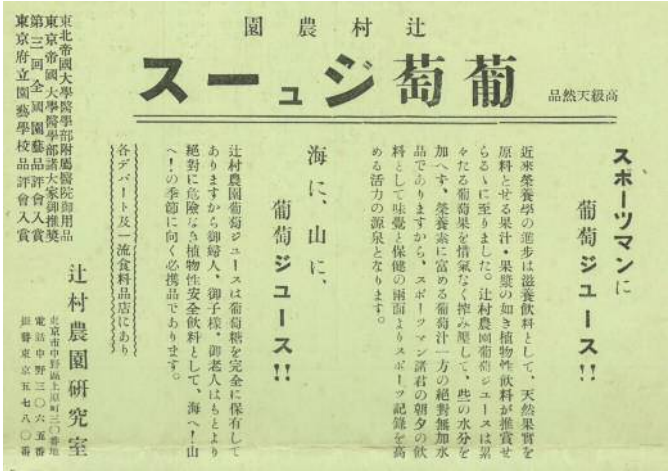
辻村農園の宣伝広告。花卉や果物・野菜・種苗などが幅広く生産されていたことがうかがえる。また、小田原だけではなく、日本橋をはじめ東京各地に販売店を開いていたことや、農園の規模の大きさが読み取れる。

なお、『箱根植物』は、箱根で採集した植物の情報や箱根細工について紹介されている書籍。

３－４　辻村農園宣伝チラシ 昭和戦前期 個人蔵

「味覚の藝術＝辻村農園のシロップ」と題した宣伝チラシ。「動物性飲料の最良なるは牛乳」「植物性飲料の優秀なるは高級天然シロップ」と銘打ち、牛乳とシロップを混ぜて飲めば「天下無比なる滋養飲料」になると宣伝している。

画面中央部には辻村農園の苺畑の写真が掲載されている。「小田原の西北園内五十余萬坪」と記されており、規模の大きさがうかがえる。



辻村農園

スーュジ葡萄

高級天然品

スポーツマンに
葡萄ジュース!!

近來榮養學の進歩は滋養飲料として、天然果實を原料とせる果汁・果漿の如き植物性飲料が推賞せらるゝに至りました。辻村農園葡萄ジュースは累々たる葡萄果を惜氣なく搾り壓して、些の水分を加へず、榮養素に富める葡萄汁一方の絶對無加水品でありますから、スポーツマン諸君の朝夕の飲料として味覺と保健の兩面よりスポーツ記錄を高める活力の源泉となります。

海に、山に、
葡萄ジュース!!

辻村農園葡萄ジュースは葡萄糖を完全に保有してありますから御婦人、御子樣・御老人はもとより絶對に危險なき植物性安全飲料として、海へ！山へ！の季節に向く必携品であります。

各デパート及一流食料品店にあり

辻村農園研究室

東北帝國大學醫學部附屬醫院御用品
東京帝國大學醫學部諸大家御推奬
第三回全國園藝品評會入賞
東京府立園藝學校品評會入賞

3－8

3－7

3－5　辻村農園シロップ製品写真　昭和16年（1931）個人蔵

三越本店で開かれた清涼滋養飲料宣伝大会での写真と思われる。画面上部に「辻村農園高級天然シロップ」という電飾が見られる。

天然の眞價　すなはな味ひ

辻村農園の高級天然シロップ

大切な御子樣には安全なる御飲み物を

辻村農園研究室

東北帝國大學醫學部附屬醫院御用品
東京帝國大學醫學部諸大家御推奬
第三回全國園藝品評會入賞

特約販賣店

3－6　辻村農園宣伝チラシ（苺シロップ）昭和戦前期　個人蔵

苺シロップの宣伝チラシ。製品のセールスポイントやおすすめの飲み方、効能が書かれている。

「美しい色も、朗かな香りも、天然の儘で御座います。薬の人工着色で有りませんから、衛生上極めて御安心であります」という一節からは、「天然」がセールスポイントの一つだったことが分かる。また、小田原の農園で栽培した苺をシロップに加工していたようだ。

3－7　辻村農園葡萄ジュース 製品写真　昭和戦前期　個人蔵

3－8　辻村農園葡萄ジュース宣伝広告　昭和戦前期　個人蔵

辻村農園の宣伝記事。「高級天然品」「スポーツマンに葡萄ジュース」と銘打っている。「栄養素に富める葡萄汁一方の絶対無加水品」なので「味覚と保健の両面よりスポーツ記録を高める活力の源泉」になるという。

同じ葡萄ジュースを宣伝した『時事新報』（昭和7年（1932）10月7日）の記事では、「葡萄酒を男子用とすれば、葡萄ジュースは婦人向き、お子様向き」と謳っており、幅広い層への販売戦略がうかがえる。

今度辻村農園では、アルコール分のない、完全なる葡萄ジュースを作りました、婦人好適の飲物である上に、累々たる葡萄果を惜気もなく搾り圧して些の水分を加へず、文字通りの葡萄汁であるためにヴィタミンを多量に含み、病人へのすめ品として非常に喜ばれてゐます、（略）

葡萄ジュースとは葡萄糖をそのまゝ完全に保存してありますので、先づ葡萄酒を男子用とすれば、葡萄ジュースは婦人向き、お子様向きでもつまり栄養本位の酔はない葡萄酒として、家庭の常用品或は病気見舞の飲料でせう

『時事新報』昭和7年10月27日

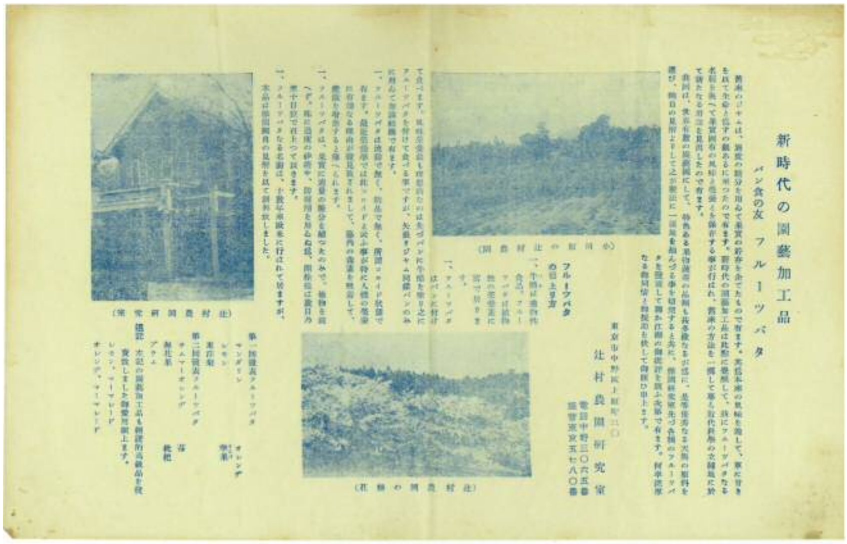
3－9

3－11

3－9 辻村農園フルーツバタ製品写真
昭和戦前期　個人蔵

3－10 辻村農園宣伝チラシ
(フルーツバタ)
昭和戦前期　個人蔵

3－10



フルーツバターの宣伝広告。従来のジャムは保存のために砂糖を多く使っていたが、果物固有の味と栄養を保存する商品を作ったと宣伝している。バターの上に塗ったりパンに直接塗ったりと食べ方が分かるとともに、オレンジやレモン、リンゴや梨など多くの種類が販売されたことが読み取れる。

3－11 辻村農園宣伝広告
(フルーツバタ)
昭和戦前期　個人蔵

菊屋の中元品カタログ。辻村農園の製品が掲載されており、贈答用としての需要があったことをうかがわせる。

Column　辻村常助の執筆活動

常助が書いた記事に「白米食か半搗米か」「米に就て反省す」がある。前者は、白米と半搗米（糠の半分を削った米、五分搗米）について、米を食べるのは炭水化物を摂取するためなので、玄米や胚芽米・半搗米などと比べて炭水化物が最も多い白米が良いと結論付けている。また後者では、白米が禁止されて代用食がすすめられる現状を批判している。

当時、日中戦争の長期化で食糧が不足しており、昭和14年（1939）には米穀搗精等制限令で白米が禁止された。常助は農業に携わる者として、「節米指導は、如何にも不景気にして、明朗闊達にして積極的なる、我国民性に背反する」と指摘しており、当時の心境がうかがえる。

Column　戦中・戦後の辻村農園

この時期の辻村農園について詳しい記録はなく、明らかになっていないことが多い。

常助が昭和23年（1948）に記した「自作農創設特別措置法第七条二項の訴願書」には、辻村農園について「数十年来一貫して（略）直営栽培続行」していたが、日中戦争やアジア太平洋戦争の戦局悪化で「小田原市当局と懇談戦時農園を偏成」したとある。その後、「戦時農園は解散したるに拘らず食糧事情愈急迫なるが故に委託栽培によりて、（略）今尚ほ二百三十余戸の市民を擁して栽培の任務を分担」していると記されている。

小田原市では、戦時中の食糧事情の悪化で、昭和19年（1944）9月に、「援農親交組」を実施した。これは、戦時食糧確保のため、町内会ごとに農地のある地域へ住民を出動・耕作させたものである。受入側の区域に「荻窪」や「水之尾」といった地名があることから、辻村農園の敷地も耕作対象だったと思われる。

昭和60年（1985）、小田原市は辻村農園の一部を買収して公園整備を始めた。その後、平成2年（1990）には辻村植物公園として市民に開放され、現在に至っている。